

IV. 平成 27 年度事業に対する自己評価

1. 平成 27 年度大学教育再生加速プログラム事業に対する自己評価

徳島大学大学教育再生加速プログラム事業（以下、「AP 事業」という。）については、毎年度自己評価を行い、外部評価委員会を開催し、事業評価を受けることで次年度の改善につなげることとしている。

自己評価については、「1. SIH 道場の実施と改善」「2. アクティブ・ラーニングの普及」「3. 事業運営の体制」「4. 情報公開」の 4 つの大項目について、それぞれ小項目を立て、以下の 4 段階で評価を行った。

「4：十分に達成できた」

「3：おおむね達成できた」

「2：達成が必ずしも十分ではない」

「1：達成できなかった」

1	SIH 道場の実施と改善	根拠資料	自己評価
1-1	各教育プログラムは適切に設計・運営・実施されたか	「SIH 道場授業運営現状確認リスト」 「授業設計表（概要）※」 「授業設計表（詳細）※」 「SIH 道場プログラム設計評価シート※」 ※授業設計コーディネーターが作成	3

○自己評価の根拠（評価 3）

平成 27 年度の SIH 道場プログラムは、15 プログラムが展開された。全てのプログラムの授業設計コーディネーターが「授業設計表（概要）」「授業設計表（詳細）」に基づき授業設計を行った。授業担当者は、SIH 道場 FD・説明会に参加し（参加率 50 パーセント）、SIH 道場の趣旨やアクティブ・ラーニング等の手法を学んだ上で授業を実施した（不参加者には授業設計コーディネーターが学部・学科において対応し、FD・説明会への参加者と合わせて 88 パーセントが SIH 道場の趣旨等の説明を受けたことになる）。授業の実施後には、授業設計コーディネーターは、「SIH 道場プログラム設計評価シート」に基づき、SIH 道場の必須要素を学生が身につけたかどうか、設計から実施までを振り返り、課題と次年度に向けた改善策を記した。本シートにおける 5 段階の総合評定（実施した SIH 道場プログラムを総合的に見て、平成 27 年度の授業設計は、学生が到達目標を達成するために、{5.十分であった、4.概ね十分であった、3.ふつう、2.やや不十分であった、1.不十分であった}。）において、15 プログラム中、1 プログラムが「5.十分であった」と評価し、11 プログラムが「4.概ね十分であった」、残りの 3 プログラムが、「3.ふつう」と自己評価した。

以上のように、各学部・学科から提出された「授業設計表（概要）」「授業設計表（詳細）」からSIH道場のプログラムは適切に設計・運営されたと言える。また、SIH道場の授業担当者対象のFD・説明会への参加者数と授業設計コーディネーターによる未受講者への対応数を合計すると、88パーセントとなり、授業担当教員はおおむね実施準備を行った上でSIH道場を担当している。さらに、授業設計コーディネーターが自己評価した「プログラム設計評価シート」の記述において、11プログラムが「4.概ね十分であった」と評価していることから、本項目について、「3:おおむね達成できた」と評価した。

○今後の改善点

- SIH道場授業担当者対象のFD・説明会への参加率を上昇させる。
- 各学部・学科の「プログラム設計評価シート」の記述に基づき、次年度のコーディネーターに改善を促す。
- 「プログラム設計評価シート」の記述のうち、実施支援に関わる内容について支援の見直し等の対応を図る。

1	SIH道場の実施と改善	根拠資料	自己評価
1-2	学生はSIH道場の目標に到達したか	「SIH道場プログラム設計評価シート※」 「学生対象SIH道場アンケート」 ※授業設計コーディネーターが作成	4

○自己評価の根拠（評価4）

各学部・学科の学生の学修成果について、それぞれの「SIH道場プログラム設計評価シート」に基づき確認すると、早期体験（体験学習）における到達度を問う設問（「設計した到達目標を学生は達成することができた」）に対して、「はい・どちらともいえない・いいえ」のうち、15プログラムの全ての授業設計コーディネーターが「はい」と回答した。ラーニングスキルの「文章力」の到達度については、15プログラム中14プログラムが「はい」と回答し、残りの1プログラムは、「どちらともいえない」と回答した。ラーニングスキルの「プレゼンテーション力」の到達度については、15プログラム中14プログラムが「はい」と回答し、残りの1プログラムは、「どちらともいえない」と回答した。ラーニングスキルの「協働力」の到達度については、15プログラム中13プログラムが「はい」と回答し、残りの2プログラムは、「どちらともいえない」と回答した。SIH道場において学生の振り返りの時間を設けたかについては、15プログラム中9プログラムが「はい」と回答し、4プログラムは、「どちらともいえない」と回答し、残りの2プログラムが「いいえ」と回答した。SIH道場において学生の振り返りにフィードバックを行ったかについては、15プログラム中11プログラムが「はい」と回答し、3プログラムは、「どちらともいえない」と回答し、残りの1プログラムが「いいえ」と回答した。

その他、各学部・学科のSIH道場のプログラム終了後には、「SIH道場学生対象アンケート」

を実施し、SIH 道場の到達度について学生の自己評価や満足度を調査した。アンケートには、受講学生 1,324 名中 1,158 名が回答した（回収率 87.5 パーセント）。SIH 道場の三つの必須に関する項目を確認すると、「体験学習で専門分野（学科での学修・研究）に対する興味関心が高まった」に、4 件法（「4.とても当てはまる」「3.どちらかといえば当てはまる」「2.どちらかといえば当てはまらない」「1.まったく当てはまらない」）で、「4.とても当てはまる」「3.どちらかといえば当てはまる」を選択した学生は、受講学生全体で 86 パーセントだった。ラーニングスキルの「文章力」については、「レポート等の学術的文章を書く際に必要な準備や基本的なルールを理解した」に、「4.とても当てはまる」「3.どちらかといえば当てはまる」を選択した学生は、受講学生全体で 91 パーセントだった。ラーニングスキルの「プレゼンテーション力」については、「プレゼンテーションを効果的に行うために必要な準備・姿勢・資料を理解した」に、「4.とても当てはまる」「3.どちらかといえば当てはまる」を選択した学生は、受講学生全体で 90 パーセントだった。ラーニングスキルの「協働力」については、「1つの課題に対して、他者と協力して取り組む際の留意点を理解した」に、「4.とても当てはまる」「3.どちらかといえば当てはまる」を選択した学生は、受講学生全体で 91 パーセントだった。振り返りについて、「学修（体験）を振り返ることの重要性を理解した」に、「4.とても当てはまる」「3.どちらかといえば当てはまる」を選択した学生は、受講学生全体で 86 パーセントだった。プログラム全体の満足度として、「SIH 道場の教育プログラムは全体的に満足できるものであった」に、「4.とても当てはまる」「3.どちらかといえば当てはまる」を選択した学生は、受講学生全体で 83 パーセントという結果となった。

以上のように、授業設計コーディネーターが「プログラム設計評価シート」において、SIH 道場の三つの到達目標について学生の学修成果に基づき評価した結果と学生アンケートの結果から、本項目について、「4：十分に達成できた」と評価した。

○今後の改善点

- ▶ 「SIH 道場プログラム設計評価シート」から、おおむね学生は SIH 道場の到達目標を達成していると言えるが、「振り返り」に関する項目においては、SIH 道場において、振り返りの時間を十分に設けていないプログラムや学生の行った振り返りに対して、十分なフィードバックを行っていないプログラムも少数ながら見られる。これらの課題については、プログラムごとに改善を図る必要がある。
- ▶ 「学生対象 SIH 道場アンケート」の結果から、SIH 道場の到達目標について、アンケートに回答した学生の 80 パーセント以上が達成したと評価しているが、とくに「体験学習」や「振り返り」については、より充実した内容の提供や指導を行える余地がある。

1	SIH 道場の実施と改善	根拠資料	自己評価
1 - 3	教員はSIH道場の目標に到達したか	「教員対象 SIH 道場アンケート」 「SIH 道場授業運営現状確認リスト※」 ※AP 実施専門委員会が作成	2

○自己評価の根拠（評価2）

平成 27 年度 SIH 道場の全てのプログラムが終了した 9 月中旬から 10 月初旬までの間で、SIH 道場の授業担当教員を対象としたアンケートを実施した。今年度は回答が任意であったため、回収率は 33.9 パーセントという結果となった。教員が SIH 道場の授業を通して身につける三つの到達目標について確認すると、アクティブ・ラーニングについては、「アクティブ・ラーニング型授業を実施することができる」に、「4.とても当てはまる」「3.どちらかといえば当てはまる」を選択した教員は、授業担当教員全体で 73 パーセントだった。反転授業について、「反転授業を実施することができる」に、「4.とても当てはまる」「3.どちらかといえば当てはまる」を選択した教員は、授業担当教員全体で 42 パーセントだった。ルーブリックについて、「ルーブリックを用いて学生を評価することができる」に、「4.とても当てはまる」「3.どちらかといえば当てはまる」を選択した教員は、授業担当教員全体で 50 パーセントだった。授業実践の振り返りについて、「自らの教育経験の振り返り（e ポートフォリオ等）の意義を理解した」に、「4.とても当てはまる」「3.どちらかといえば当てはまる」を選択した教員は、授業担当教員全体で 47 パーセントだった。プログラム全体の満足度として、「SIH 道場の教育プログラムは全体的に満足できるものであった」に、「4.とても当てはまる」「3.どちらかといえば当てはまる」を選択した教員は、授業担当教員全体で 49 パーセントという結果となった。

加えて、SIH 道場担当教員は、授業終了後に e ポートフォリオ（Mahara）上や紙媒体で、授業実践についての振り返りを行うことになっている（平成 27 年 10 月 13 日が実施期限）。振り返りを行った教員は、紙媒体によるものも合わせると、担当教員 188 名中 94 名（50 パーセント）であった。

以上のように、教員対象アンケートの結果と授業終了後の授業実践の振り返りの実施率から、本項目について、「2：達成が必ずしも十分ではない」と評価した。

○今後の改善点

- 「教員対象アンケート」の回答率が低いため、改善の資料とするためには、より向上させる必要がある。
- 教員の到達度については、ルーブリック、反転授業、教育経験の振り返りの項目について、とくに数値が低いため、それぞれの意義について、より一層周知する必要がある。
- 教員のプログラム満足度についても、学生アンケートと比較すると低い結果にとどまっているため、学生にとっては意義のあるプログラムであることを教員に周知する等、モチベーションの向上を図る必要がある。

1	SIH 道場の実施と改善	根拠資料	自己評価
1-4	次年度のプログラム改善に向けた検証が実施されたか	「学生対象 SIH 道場アンケート」 「教員対象 SIH 道場アンケート」 「SIH 道場プログラム設計評価シート」 「SIH 道場に関する評価・改善 WG」報告 「SIH 道場の取組と課題」報告※ ※AP 実施専門委員会委員が作成	3

○自己評価の根拠（評価3）

各プログラムの授業設計コーディネーターが、「SIH 道場プログラム設計評価シート」に基づき SIH 道場の取組の振り返りを行う際には、各プログラムでの効果検証の参考資料として、学生および教員対象のアンケート集計結果を提供している。これらの資料を参考に、授業設計コーディネーターは総合的にプログラムを評価し、「SIH 道場プログラム設計評価シート」の項目「改善したい点」と項目「次年度に向けた対応」に記述を行っている（15プログラム全てが記載）。さらに、各学部・学科の大学教育再生加速プログラム実施専門委員会（以下、「AP 実施専門委員会」という。）委員が、学部単位での取組報告「SIH 道場の取組と課題」を作成し、プログラムの総括を行っている。加えて、「SIH 道場に関する評価・改善ワーキンググループ」において、SIH 道場を受講した 19 名の学生委員が SIH 道場の良かった点、改善点について提案を行っている。今年度実施した学生委員全員に対するインタビュー結果については、学生の回答に基づき現状をまとめた上で今後活かすためのポイントを提示している（本報告書「SIH 道場評価・改善ワーキンググループ学生委員からの提案」を参照）。各学部・学科の次年度の授業設計コーディネーターは、これらを参考にしてプログラム改善を行うことができる。

以上のように、次年度のプログラム改善に向けた検証のステップは明確に位置づけられていると言える。しかしながら、次年度の授業設計コーディネーターがプログラム改善のためにとくに参照すべき資料である「SIH 道場プログラム設計評価シート」の項目「次年度に向けた対応」について、若干のプログラムにおいて、記載が具体的ではない点が見られ、改善に結びつくような検証が十分にできたとは必ずしも言えないことから、「3：おおむね達成できた」と評価した。

○今後の改善点

- プログラム設計シートの項目「次年度に向けた対応」において、記載が具体的ではない点が見られることから、平成 28 年度の授業設計コーディネーターに対しては、次年度の改善につながる具体的な記載を行うよう依頼する必要がある。

1	SIH 道場の実施と改善	根拠資料	自己評価
1-5	実施のための支援（教育改革推進部門、ICT 活用教育部門、SIH 道場コンテンツ作成ワーキンググループ等）は適切に行われたか	「必須項目設計表」サンプル 「授業詳細」例示資料 学生用テキスト、反転ビデオ教材、振り返りフォーマット※コンテンツ作成 WG が作成 「SIH 道場の授業設計・実施・評価に関する支援」報告	4

○自己評価の根拠（評価4）

SIH 道場の実施の支援については、総合教育センター教育改革推進部門を中心とし、ICT 活用教育部門、SIH 道場コンテンツ作成ワーキンググループ等と協力して行った。主な内容は、次の5つである。①授業設計のサンプルの提示、②授業に必要な教材コンテンツの作成、③授業計画・実施中の随時個別相談対応、④授業担当者に対する説明会・FD の実施、⑤授業改善に向けた評価の支援。

「①授業設計のサンプルの提示」としては、授業設計コーディネーターが、SIH 道場の三つの必須項目を入れ込んだ設計を円滑に行えるよう、授業設計の開始前に、「必須項目設計表」のサンプルおよび「授業詳細」の例を示している。「②授業に必要な教材コンテンツの作成」としては、学生用テキストの作成・配布、反転授業用のビデオ教材の作成・Moodle 上での提供、ルーブリック評価表の作成・Moodle 上での提供、e ポートフォリオ上での教員の振り返りフォーマットの作成を行った。「③授業計画・実施中の随時個別相談対応」については、授業設計や実施時における授業設計コーディネーターからの問い合わせに対して、教育改革推進部門教員が随時回答を行った。「④授業担当者に対する説明会・FD の実施」については、平成 27 年度の SIH 道場実施に向けて、授業担当者を対象に SIH 道場の趣旨を説明し、アクティブ・ラーニングの授業方法を身につけるための FD・説明会を蔵本キャンパス、常三島キャンパスごとに計 6 回開催した。「⑤授業改善に向けた評価の支援」として、教育改革推進部門において、「SIH 道場プログラム設計評価シート」フォーマットの作成および学生・教員対象アンケート調査の設計、結果集計のとりまとめを行うなど、次年度の改善につなげるための評価活動の支援を行った。

以上のように、5つの側面から、実施のための支援が適切に行われたため、本項目について、「4：十分に達成できた」と評価した。

○今後の改善点

- SIH 道場の設計・実施・評価のための支援は、今後も継続していく。今後は、授業担当者対象の FD・説明会の受講者アンケートを実施するなど、支援内容の改善に向けた取組が必要となる。

2	アクティブ・ラーニングの普及	根拠資料	自己評価
2-1	アクティブ・ラーニングを学士課程全体に波及させるための環境整備が適切に行われたか	案内「アクティブ・ラーニングスペース教室」貸出用 SIH 道場関連図書リスト 「eポートフォリオシステムの構築」報告	4

○自己評価の根拠（評価4）

環境整備の一環として、授業においてアクティブ・ラーニングの授業手法を導入しやすいように、可動式の机と椅子、ホワイトボードを設置したアクティブ・ラーニングスペース教室の提供を行った。提供しているのは、総合科学部1号館南棟3階情報実習室3、総合科学部2号館東棟2階地域連携実習室、医学臨床A棟1階スキルラボ5・6（医学部第三・四会議室）、附属図書館本館3階多目的ホール（1）の4教室である。

また、ICT活用教育部門が中心となり、eポートフォリオシステム（Mahara）の導入を行い、学生と教員が Mahara 上で振り返りを行うことのできるシステム環境とともに、マニュアルの提供、教員および学生対象の説明会を実施した。

その他、SIH 道場の授業設計や授業の実施の際に、授業設計コーディネーターや授業担当教員が参考にできるよう、「SIH 道場」関連図書として、計167冊を購入の上リスト化し、貸出を行った（URL：http://www.tokushima-u.ac.jp/campus/education/acceleration_tosyo.html）。

以上のように、アクティブ・ラーニングを普及させるための環境整備が適切に行われたため、本項目について、「4：十分に達成できた」と評価した。

○今後の改善点

- ▶ アクティブ・ラーニングスペース教室、関連図書の提供については、SIH 道場授業設計コーディネーターおよび授業担当教員への情報提供を継続的に行う必要がある。
- ▶ eポートフォリオシステムについても、利用のための支援を継続する必要がある。

2	アクティブ・ラーニングの普及	根拠資料	自己評価
2-2	アクティブ・ラーニングを学士課程全体に波及させるための取組が効果的に実施されたか	アクティブ・ラーニング事例カード※ 「AP シンポジウム（「アクティブ・ラーニング」「反転授業）」報告 ※総合教育センター教育改革推進部門が作成	2

○自己評価の根拠（評価2）

SIH 道場を担当した教員が、SIH 道場で実践しながら学んだアクティブ・ラーニングの手法を担当する別の科目でも実施することによってアクティブ・ラーニングは初年次科目だけでなく、専門科目にも波及していく。しかしながら、SIH 道場の取組においては入学直後の初年次学生向

けの授業内容にアクティブ・ラーニングを取り入れているため、専門教育におけるアクティブ・ラーニングの導入に際しては、授業内容に適した手法を様々に考案・選択する必要がある。そこで、学内を中心にアクティブ・ラーニングの事例調査を行い、アクティブ・ラーニングの手法と導入の目的、学問領域ごとにまとめた事例カード（27事例）を作成し随時提供した。

また、平成28年1月6日に徳島大学を会場とするAPシンポジウムを開催し、「アクティブ・ラーニング」と「反転授業」をテーマに、学内教員が実践事例を報告するワークショップを実施し、取組内容の詳細や課題について学内外の教職員で共有する機会を設けた（「アクティブ・ラーニング」への参加者は計37名、「反転授業」への参加者は45名）。

以上のように、アクティブ・ラーニングを導入した授業を普及させるために、事例集の作成やシンポジウムの開催を行ったが、事例カードについては、今年度を通して事例を徐々に蓄積し分類整理していったことから全学的な提供には至っていない。「アクティブ・ラーニング」「反転授業」についての実践事例を共有するためのシンポジウムについては、全教員数1021名に鑑みると参加者数は一部に限定されている。また、SIH道場を受講した学生が、専門科目においてもアクティブ・ラーニングを実践し振り返りを行いながら学修を継続することがSIH道場の成果となるが、これについては今年度がSIH道場の開始初年度であり、未だ効果検証の段階にない（平成28年度末、平成30年度末に調査を実施予定）。

これらのことから、アクティブ・ラーニングを学士課程全体に波及させるための取組が効果的に実施されたとは言えないため、本項目について、「2：達成が必ずしも十分でない」と評価した。

○今後の改善点

- アクティブ・ラーニングの事例カードについては、作成してカードをウェブ上から閲覧できるようにする等、学内的に共有できる仕組みを構築し、今後も事例を継続的に収集・公開していく必要がある。
- APシンポジウムについては、学内での十分な周知によって、より多くの教員の参加を促すと共に、さまざまな分野の教員がアクティブ・ラーニング、反転授業の実践事例を報告できるよう、今後も企画を継続する。
- SIH道場を受講した学生の効果検証については、調査の実施準備を進める。

3	事業運営の体制	根拠資料	自己評価
3-1	AP実施専門委員会の組織構成は、事業目的に照らして、適正なものであったか	「徳島大学AP実施専門委員会規則」 「AP実施専門委員会委員名簿」 「AP事業実施体制図」「AP事業実施報告書」	4

○自己評価の根拠（評価4）

AP実施専門委員会は、次の4つを審議するために設置されている。①全学共通科目「SIH道場～アクティブ・ラーニング入門～」の開発及び実施に関すること。②徳島大学におけるアクテ

ィブ・ラーニングに関する調査及び評価に基づく改善に関すること。③ アクティブ・ラーニングを推進するための環境整備に関すること。④ その他アクティブ・ラーニングの推進に関すること。

専門委員会は、副学長（教育担当）を委員長とし、全学共通教育センター長、総合教育センター教育改革推進部門長、各学部（学部併任された大学院教員を構成員として含む。）および全学共通教育センターから選出された教員 各 1 人、総合教育センターから選出された教員 3 人、学務部長、学務部教育支援課長及び学務部教育支援課教育企画室長、その他専門委員会が必要と認める者で構成されている。

AP 実施専門委員会において、SIH 道場の実施に関する、全体統括、授業設計コーディネーター等の人材の選出・割り当て等を行う他、事業全体の評価に基づく改善の計画を審議し、実施に当たっては、総合教育センター教育改革推進部門や SIH 道場コンテンツ作成ワーキンググループ、教育について考え提案する学生・教職員専門委員会（SIH 道場に関する評価・改善ワーキンググループ）が連携して支援や評価を行い、各学部・学科の授業設計コーディネーターを通じた部局の SIH 道場実施支援を図った。

以上のことから、AP 実施専門委員会の組織構成は、事業目的に照らして適正なものと言えるため、本項目について、「4：十分に達成できた」と評価した。

○今後の改善点

➤ 今後も現在の組織構成を維持し、事業を企画・運営していく。

3	事業運営の体制	根拠資料	自己評価
3-2	AP 実施専門委員会の運営は、事業目的に照らして、適正なものであったか	AP 実施専門委員会会議資料 「AP 事業実施体制図」「AP 事業実施報告書」	3

○自己評価の根拠（評価 3）

AP 実施専門委員会では、平成 27 年度において委員会を 5 月、10 月、2 月の計 3 回開催した。委員会においては、平成 27 年度の SIH 道場の設計・実施状況のとりまとめを行い、各学部・学科でプログラムの改善を行うことができるよう、アンケート調査等の実施を含む評価指標の策定を審議した。加えて、SIH 道場の取組が学士課程全体に波及し、アクティブ・ラーニングが全学的に展開するための施策の検討等を行った。AP 実施専門委員会の委員は、AP 実施専門委員会での決定事項を各学部・学科の授業設計コーディネーターに伝えるという役割を担うほか、SIH 道場終了後に授業設計コーディネーターがプログラム設計について行った振り返りの内容や課題をとりまとめ、AP 実施専門委員会に報告する。それを受けて、AP 実施専門委員会では、事業運営の方法を見直すことができる。

今年度の委員会を通して、各プログラムの授業設計コーディネーターが SIH 道場を設計・運営・実施できるような支援の体制を整えることができた。また、実施したプログラムの振り返り

により、次年度の SIH 道場の設計・実施の改善に繋げることでできる評価の仕組みも構築することができた。しかしながら、AP 実施専門委員会委員と授業設計コーディネーターとの連携という点において、プログラムによっては情報共有が十分ではないという課題も見られたため、「3：おおむね達成できた」と評価した。

○今後の改善点

- AP 実施専門委員会委員と授業設計コーディネーターのとの連携の課題については、実施専門委員会委員と授業設計コーディネーターが同一でない学部・学科においてとりわけ生じる。実施専門委員会からコーディネーターへの情報伝達の方法について、工夫改善の余地がある。

3	事業運営の体制	根拠資料	自己評価
3-3	事業の効果検証に基づき、改善に繋げるための PDCA サイクルが整備されていたか	「AP 事業全体事業評価計画」 「SIH 道場評価一覧」 「AP 事業実施報告書」	3

○自己評価の根拠（評価 3）

AP 実施専門委員会は、SIH 道場を含む、AP 事業全体の評価指標を策定し計画としてまとめ、学生および教員対象のアンケート調査を計画・実施した他、これらのアンケート集計結果に基づき、授業設計コーディネーターが次年度の改善に向けた振り返りを行うために、「プログラム設計評価シート」を提供した。各学部・学科の AP 実施専門委員会委員は、この設計評価シートの記載内容等に基づき、学部での SIH 道場の成果と課題を報告書にまとめている。これらのプログラムの実施結果を、事業運営や実施支援の観点から総合的に自己評価し、その結果をもとに外部評価委員会による評価を受けることで、次年度の改善につなげることができる。今年度は、SIH 道場の実施初年度として、SIH 道場プログラムの改善のサイクルの構築とともに、AP 事業全体の PDCA のサイクルの整備を行った。

以上のように、次年度の事業改善に向けた PDCA サイクルは整備されたが、具体的な改善に結びつけられるかどうかは現段階では判断できないため、「3：おおむね達成できた」と評価した。

○今後の改善点

- AP 事業の自己評価に基づき、外部評価委員会の評価を受けた結果を、事業改善に活かしていくことが課題となる。

4	情報公開	根拠資料	自己評価
4-1	AP事業の取組を学内へ適切に広報し共有していたか	徳島大学ウェブページ「大学教育再生加速プログラム (AP)」 「SIH 道場振り返りシンポジウム」報告 AP事業リーフレット※ ※AP実施専門委員会が作成	3

○自己評価の根拠（評価3）

AP事業の取組については、大学ウェブページにおいて情報提供を行っている。SIH道場の概要や目的、年度計画等を記載している他、SIH道場の学生用テキスト(PDF版)も公開している。また、平成27年度に実施したSIH道場の取組を共有し課題を検討するために、学内教職員、学生を参加対象とする「SIH道場振り返りシンポジウム」を開催した(学内教職員、学生および外部評価委員を含む計127名が参加)。その他、AP事業の目的や内容について大学全体で共有化を図るために、徳島大学大学教育再生加速プログラム事業リーフレットを作成し学内教職員に配布している。

以上のように、AP事業について学内へ広報し共有する取組を行っているが、「SIH道場振り返りシンポジウム」への参加者数等に鑑みても、学内教員への広報の方法についてはさらなる工夫の余地があると考えられるため、「3:おおむね達成できた」と評価した。

○今後の改善点

- 大学ウェブページでの情報提供については、さらに内容を充実させることができる
- 「SIH道場振り返りシンポジウム」については、学内での十分な周知によって、より多くの教職員、学生への参加を促す必要がある。

4	情報公開	根拠資料	自己評価
4-2	AP事業の取組を学外へ適切に広報し情報提供していたか	徳島大学ウェブページ「大学教育再生加速プログラム (AP)」 報告「APシンポジウム(「アクティブ・ラーニング」「反転授業)」」 「学外への情報発信」報告	4

○自己評価の根拠（評価4）

AP事業の取組については、大学ウェブページに随時掲載している他、学内外の教職員を参加

対象とする AP シンポジウム（「アクティブ・ラーニング」「反転授業」）を開催し、学内教員が実践事例を報告するワークショップを実施することで、学内外の教職員と取組を共有する機会を設けた。その他、学外の大学関係者が多数集まる場で、SIH 道場の取組に関する発表を 6 件、講演を 1 件行った他、大学教育再生加速プログラムの取組について 2 つのジャーナルに寄稿することで幅広い情報発信を行った。また、他大学からの訪問調査の依頼 3 件についても対応を行っている。

以上のことから、AP 事業の取組を学外へ適切に広報し情報提供していたと言えるため、本項目について、「4：十分に達成できた」と評価した。

○今後の改善点

- AP シンポジウムについては、学外の参加者をより増加させるための工夫が必要である。
- 学外への情報提供という点では、「SIH 道場振り返りシンポジウム」の参加対象を学外教職員まで広げることも検討できる。